

「絶望的な蛮勇気」をめぐって

——大江健三郎と岩野泡鳴

大杉 重男

1 エッセイ「絶望的な蛮勇気」の位相

「新潮」一九六五年一月号に、大江健三郎は「絶望的な蛮勇気」というタイトルの短いエッセイを載せている。その冒頭で大江は、「僕は人に何らか模範を示したい……なるほど人間といふ者はあゝいふ風に働く者かといふ事を出来はしまいが、世人に知らせたい」と語ったと伝えられる二葉亭四迷と、「墮落、荒廃、倦怠、疲労——僕は、デカダンと云ふ分野に放浪するのを、寧ろ僕の誇りとしようといふ気が起こった」と書く岩野泡鳴を並列して紹介し、両者を共に「同業の先輩として誇りをいだく」と礼讃する。そして大江は特に「社会のアウトサイダー」としての泡鳴の位相に焦点を当てて、その「人間的威厳」を称え、泡鳴の「誇り」の源泉に「彼の文学に

対する、アウトサイダー気質についての少数の読者への確信」があったからだと分析する。

ただこのエッセイで奇妙なのは、タイトルとなっている「絶望的な蛮勇気」という言葉自体についての説明が文中に現れないことである。文中で大江が引用している泡鳴の作品は『耽溺』であるが^三、この小説に「絶望的な蛮勇気」という言葉は登場しない。

泡鳴の作品の中で「絶望的な蛮勇気」という言葉が現れるのは、新潮文庫版『泡鳴五部作』^四の『毒薬を飲む女』の次の場面においてである。

部落民の熱病人に、殆んどあらゆる病気の問屋！ 渠は、かう思つて、ますます絶望的な蛮勇気を出した。

「死にたくはない——今、一度、この女を完全なからだに返し

て、その全身の愛を本統に自分を捧げさせて見ないぢやア置かないぞ。それからなら、自分が死んでもいい、また破れ草履を棄てるやうに、この女をすツぱりおツぱり出していい。」

かう考へて、渠は片手で自分の痛みの個所を押しこらへながら、熱に疲れてよく眠つてゐるかの女の二つの病気の、直つた上の楽みを想像した。

これは文学者である主人公の田村義雄が、病に臥せる愛人の清水鳥Ⅱお鳥に対して抱く内面の描写である。『五部作』の第一作『発展』において義雄は糟糠の妻千代子に倦み、紀州田辺から裁縫学校に入るために上京したお鳥を、学費を出すと言って愛人にするが、お鳥は義雄に淋病を移されて、義雄を責める。それに続く第二作『毒薬を飲む女』ではお鳥は「おもいかぜ」に罹つて床に臥し、義雄は、自身も耳と痔を病みつつ、引用のような感慨を持つ。お鳥は紀州で男と関係していたが、男が「どす」（「らい病のことを紀州ではさう云ふて」とされる）であつたために兄に入籍を反対されて結婚できなかったという過去があつた。義雄は「電燈使用の室内では気が付かなかつたことだが、ランプになつてから」お鳥の顔が美しく見えるようになり、「妖女！ 閨中美人！」と思う一方で、「顔の輪郭にどことなく人並みより締つてゐないところがあるのを、紀州には多いといふ部落民に生れた娘ではないか」と疑いを抱く。義雄は自分が憧れる文学的な美女たち（「米国の浪漫的詩人アランポーが歌つた「おほがらす」」、「英国の画家詩人口セチの「昇天聖女」」、

「ワルツホイトマン」の「揺り籠から」、義雄自身の「長い詩篇」「三界独白」の「常磐の泉」）を想起し、それらの詩に歌われた「天女や恋人」とは対極的な女としてお鳥（この名前はポーの「おほ鴉」を踏まえているとも読める）を考えつつ、それでもなおお鳥に自分を愛させようと欲望する。

「絶望的な蛮勇気」という言葉は泡鳴の小説の中ではこの文脈において現れるが、大江はそれを泡鳴の文脈を超えて拡張的に用いている。すなわち大江は前述のエッセイで「かれは穩健な良識家として現状を維持するどころか、窮地におちいればおちいるほど《絶望的な蛮勇気》をだして、その深みにもぐりこもうとしたのだつた」と述べているが、その「窮地」の具体的な内容は、『五部作』ではなく『耽溺』から取られている。『耽溺』は主人公の「僕」が芸者吉弥を女優にしつつ「めかけ」にもしようとして破綻する物語であり、確かにそこで「僕」が陥る「窮地」は、『五部作』において義雄がお鳥との関係で陥る「窮地」を予告するものだが、両者の違いは、後者には「部落民」をめぐるテーマが新たに付け加えられていることにある。

この時『五部作』の義雄が抱く「部落民」観が非常に差別的であることは明白であり、大江が、「絶望的な蛮勇気」において『五部作』に言及しなかった理由もそこにあると言えるかもしれない。しかしにもかかわらず大江は、同時に『五部作』の義雄の「勇気」（結局お鳥が本当に「部落民」だったかどうかは作中では明らかにならない）に魅了されているようにも見える。

2 「不良少年」と「正統性」

大江が泡鳴を「アウトサイダー」と呼ぶのは、河上徹太郎の『日本のアウトサイダー』における泡鳴論^五を踏まえている可能性があるが、河上は『五部作』に言及するものの「絶望的な蛮勇気」という言葉は引用していない。この言葉は、大江が泡鳴のテクストから独自に直接読み取ったものであり、一九六五年前後、大江はこの言葉を何度も引用している。すなわち大江は、エッセイ「絶望的な蛮勇気」を発表後に夏から秋にかけて長期のアメリカ旅行に行くが、その途中で書かれたエッセイ「私の文学 持続せよ、持続せよ」^六においても次のように「絶望的な蛮勇気」に言及している。

不良少年は、かれを拒んでいる他人たちにむかって、まったく一片の理由もなく、いわば自暴自棄で、岩野泡鳴の言葉をもちいれば、『絶望的な蛮勇気』を発揮して、インネンをつける。小説家もまた、現実世界に対して、まったくむりおしに関係づけをおこない、しかもあえて自分の正統性を主張するのである。

自分を拒む他者に対して暴力的に「関係」をつけ、そこに「正統性」を主張すること、大江は「小説家」の創作行為と類比的に理解する。「不良」とはそもそも「正統性」からの逸脱という意味を持つが、大江は「正統性」からの逸脱こそが真の「正統性」である

と言おうとしているようにも見える。

これと比較できるのは、アメリカ旅行中に日本で出版された『ヒロシマ・ノート』^七における、やはり「絶望的な蛮勇気」への言及である。

原爆病院長に、広島の高校生たちは、もつとも人間的な信頼をいだいて協力するであろう。僕はそれを信じる。最悪の深淵をのぞいた人間、そしてそれを克服すべく努力している、岩野泡鳴のいわゆる『絶望的な蛮勇気』をもった人間、すなわち広島医師たちを、信頼することのできない者、それほどにも疑い深い若者が広島にいるとは僕は考えない。

なぜなら、広島のおそらくは不安をひそめたハイ・テイーンたち（その若者たちのひとりは顔のケロイドを、敵を威嚇するための一種の兇器として有効に使い幼い無法者となった。かれがケロイドの皮膚の奥にかくしていたもの、それを逆転して威嚇のエネルギーとしたもの、それはもつともナイーヴな不安にほかならない）が信頼できる唯一の大人たちこそは、かれらとおなじ不安を共有しながら、しかも不撓不屈な広島医師たちであろうからである。

ここで大江は「次の世代の原爆症の調査の問題を現実的におしすすめてゆくであろう」重藤文夫原爆病院長に、「岩野泡鳴のいわゆる『絶望的な蛮勇気』をもった人間」を見る。そこでは自身も病氣

の泡鳴が、お鳥の病気を治そうと絶望的に考えることと、自身も被爆者である重藤院長が被爆者たちを治療することが重ね合わされる。ただこの重ね合わせには、「むりおし」な部分もある。実際「顔のクロイドを、敵を威嚇するための一種の兇器として有効に使い幼い無法者となった」「ハイ・ティーン」の方が、「絶望的な蛮勇気」の形容にふさわしい存在にも見える。

しかし大江は敢えて「絶望的な蛮勇気」の形容を重藤院長にも与える。大江は重藤を「広島の実を正面からうけとめ、絶望しすぎず、希望を持ち過ぎることもない、そのような実的な人間」と評して「正統的な人間」と呼ぶが、この「広島の正統的な人間」は、同時代の中国の核実験による反核運動の動揺という状況において、「日本の新しいナショナリズムの積極的シムボルのイメージをあらわすもの」とされる。重藤は確かに「正統的」という形容にふさわしく見えるが、大江がそこに泡鳴的な「絶望的な蛮勇気」を接続したのは、「ナショナリズム」が成立するためには、単なる正義だけではない「現実世界に対して、まったくむりおしに関係づけをおこなう」力の必要性を直観していたからだと考えられる。

3 『万延元年のフットボール』における「勇気」の限界点

だが「不良少年」の勇気と「広島医師たち」の勇気は、原爆という外的で理不尽な力だけでは、持続的に接合できない。すなわちエッセイ「絶望的な蛮勇気」の二年後に連載・刊行された『万延元

年のフットボール』^八は、両者の結合の破綻を重層的に描いた批評的物語である。この小説は、語り手「僕」＝根所蜜三郎とその弟鷹四の葛藤の物語と言えるが、蜜三郎が「広島医師たち」的なものに共感を示すのに対して、鷹四は「不良少年」たちのリーダーとして振る舞う。

鷹四は「勇気」について、「本当の事」を言うことと結びつけた次のような独自の固定観念に取り憑かれている。

それからかれは、ニューヨークで僕の友人におなじ言葉を話したのは、この声によってだったにちがいないと思わせる声で、「本当の事をいおうか」といった。「これは若い詩人が書いた一節なんだよ、あの頃それをつねづね口癖にしていたんだ。おれは、ひとりの人間が、それをいつてしまうと、他人に殺されるか、自殺するか、気が狂って見るに耐えない反・人間的怪物になってしまいか、そのいずれかを選ぶしかない、絶対に本当の事を考えてみていた。その本当の事は、いったん口に出してしまうと、懐にとりかえし不能の信管を作動させた爆裂弾をかかえたことになるような、そうした本当の事なんだよ。蜜はそういう本当の事を他人に話す勇気が、なまみの人間によって持たれうと思うかね？」^九

鷹四にとって「本当の事」を言うことは、それを言った主体を破壊せずにはおかぬことであり、従って死を肯定する「勇気」なし

には不可能なことである。この鷹四の「勇氣」は、泡鳴の「絶望的な蛮勇氣」とは根本的なところで異なっている。泡鳴の勇氣は、「死にたくはない——今、一度、この女を完全なからだに返して、その全身の愛を本統に自分を捧げさせて見ないぢやア置かないぞ」というように、むしろ死んだ方がましな状況の中で死なないで生き続けようとする勇氣である。『五部作』の最後的一篇『憑き物』で義雄は、中学生たちを前に「おれは宇宙の帝王だ！ 否宇宙そのものだ、笑ふとは何だ！」と叫んで「満堂の笑ひ」を引き起こすが、怒りにしても死ぬような絶望は感じない。

この差異は、義雄が「文学」を信じているのに対して、鷹四が「文学」に対してあからさまに不信を表明することに現れている。蜜三郎は「作家のうちには、かれらの小説をつうじて、本当の事をいった後、なおも生きのびた者たちがいるのじゃないか？」と反問するが、鷹四は次のように「作家」を批判する。

作家か？ 確かに連中は、本当の事に近いことをいって、しかも撲り殺されもせず、氣狂いにもならず、生きのびることはあるかもしれない。連中はフィクションの枠組でもって、他人を騙しおす。しかし、フィクションの枠組をかぶせれば、どのように恐ろしいことも危険なことも、破廉恥なことも、自分の身柄は安全なままでいってしまえるということ自体が、作家の仕事を実質的に弱くしているんだ。作家自身はどんなに切実な本当の事をいうときにも、自分はフィクションの形において、

どのようなことでもいってしまえる人間だという意識があった、彼は自分のいうことすべての毒に、あらかじめ免疫になっているんだよ。それは結局読者にも伝わって、フィクションの枠組のなかで語られていることには、直接、赤裸の魂にぐさりとくることは存在しないと見くびられてしまうことになるんだ

一〇。

この鷹四の作家批判は、大江が前述のエッセイ「絶望的な蛮勇氣」において同時代の「高名で裕福なインサイダー」としての作家、「マス・コミュニケーションの膨大な数の俗物たちに支持される作家」たちに向けた批判と類似する。大江は、戦後日本の高度経済成長下の「インサイダー化」した文学者たちとの対比において、明治時代の岩野泡鳴の「アウトサイダー」としての文学者のあり方に共感を示していたが、「作家」を否定する鷹四は「本当の事」を言うという言語表現行為にこだわる点において、逆説的に泡鳴的な「アウトサイダー」的文学者を反復しようとしたとも言える。

しかし鷹四は「本当の事」を言うことを突き詰めることで、大江が設定した「インサイダー」と「アウトサイダー」の区別を解体し、「アウトサイダー」であることの不可能性を、極限的な「外」の体験において明らかにしてしまう。すなわち『万延元年』のクライマックスで、鷹四が蜜三郎に話す「本当の事」とは、鷹四には生を肯定する泡鳴的な「絶望的な蛮勇氣」が欠けていた、あるいは不可能であったということである。鷹四の告白によると、鷹四は母の死後、

「白痴」の妹と共に伯父の家に住んだが、鷹四は「自分と妹をめぐって一種の貴種流離譚を作りあげて、曾祖父さんとその弟以来の自分の家系にひどく拡大した誇りを抱いていた」ために、妹以外の女性とは付き合わなかった。そのために鷹四と妹の間に肉体関係があるのではないかという噂が立ち、そしてその噂に逆に影響されて、鷹四は十七歳の時に妹を犯してしまう。妹は最初は性交を嫌がっていたが、「他のすべての人間どもに背をむけて、兄妹で反社会的に結束して、いつまでもふたりで生きてゆく」ための手段と教えられて、喜んで鷹四を受け入れるようになる。そして妹は妊娠するが、妹は鷹四に言われて相手について嘘をつき、伯父は妹に「墮胎手術」と「不妊手術」を受けさせる。手術の後、心身ともに傷ついた妹は、鷹四に性的な慰めを求めるが、鷹四は「妹の、その内奥が傷ついている性器そのものに恐怖心を持ったし、生理的な嫌悪感をもた抱いた」ためにそれを拒み、妹を撲ってしまう。妹は鷹四が嘘をついたと責め、翌朝自殺する。

『五部作』の義雄が、自分が病気を移したお鳥について「この女を完全なからだに返」すことを「絶望的な蛮勇気」を出して考えた（そのことに成功しないとしても）のに対して、鷹四は傷ついた妹に対して「勇気」を出すことなく、「恐怖心」と「嫌悪感」によって拒絶してしまう。もちろん「不妊手術」を受けた妹の身体は、物理的に「完全なからだに返」すことは不可能であり、鷹四がたとえ「勇気」を出したとしても、その「絶望」度は、義雄の比ではない。しかし鷹四の告白を聞いた蜜三郎は、鷹四に同情することなく、

鷹四の「本当の事」をそれがもたらす効果という視点から次のように否定する。

いま、僕に聞かせた汚らしい告白にしても、もし僕が、いやそれだって、いったん口に出してしまうと他人に殺されるか、自殺するか、気が狂って見るに耐えない反・人間的な怪物になってしまうかの、絶対的に本当の事などではないと鷹に保障してやれば、きみはただちに救助されるといったたぐいのものじゃないか？ たとえ無意識のうちにであつても、きみは僕がそのような過去の体験ぐるみ現在の鷹を許容して、引き裂かれている状態から一挙にきみを解放してくれることを期待して饒舌にしゃべりたてたのではないか？ たとえば明日の朝、谷間の他人どもの前でもういちど、妹の死について告白する勇気がきみにはあるのか？ それこそもっとも危険な勇気だが、それはありはしないだろう二。

鷹四は過去の自分に「勇気」がなかったという告白を「勇気」をもつてしようとした。しかし蜜三郎はその告白にも「勇気」がないと否定する。なぜならその告白を肉親ではない「谷間の他人ども」に対してする「勇気」を鷹四が持たないからである。ここで蜜三郎はかつて鷹四が「作家」を批判した論法を、そのまま鷹四に適用し、「フィクションの枠組のなかで語られていることには、直接、赤裸の魂にぐざりとくることは存在しないと見くび」る「読者」の視点

から、村人たちのリンチで殺されたら隻眼の蜜三郎に眼球を提供するという鷹四の申し出を「僕は実際、死者の眼だつて必要としている人間だ、そういう不具者を嘲弄するな!」と批判する。

この批判は論理的ではあるが、鷹四の告白に正面から応答するものではない。しかし鷹四はこの批判の不当性に対して反論するのではなく、「蜜、きみはなぜそのようにおれを憎んでいるのだ? なぜそのような憎悪をおれに持ち続けているんだ?」と蜜三郎の批判の背後にある感情の正体を問う。蜜三郎はこれに対して「僕がどう感じるかの問題ではない」「きみのように劇的な幻影にしたがつて生きることを好む者も、もし狂気にでもおちいるのでなければ、危険な緊張をいつまでも持続させることはできないという、客観的な判断をのべているだけだ」と答えるが、「客観的な判断」とは、「インサイダー」と「アウトサイダー」のどちらのサイドにも付かないということであり、そしてそのことにおいて、結果的に「インサイダー」に与することになるだろう。

蜜三郎から拒絶された鷹四は「オレハ本当ノ事ヲ言ツタ」と書きつけて自殺し、死後村の人々は鷹四を「御霊」として神格化し、蜜三郎はそれを確認して村を去って、アフリカの「動物採集隊の通訳」となる。ここで「アウトサイダー」は飼ひ慣らされること（「動物採集隊」は野生の「アウトサイダー」的動物を、「動物園」の中に閉じ込め「インサイダー」化する装置である）によって「インサイダー」に吸収されることが暗示される。

大江は『万延元年』について「この小説は僕にとってまことに切

実な意味で、乗越え点をきざむものであった」と回想しているが二、その乗り越え点とは、大江にとって「社会のアウトサイダー」から「インサイダー」への転回点であったと言える。それは「マス・コミュニケーション」の膨張は、作家をまったくインサイダーとし、社会の名士とした」という戦後日本社会の成金的な激変に対する「客観的」な認識の反映であると同時に、大江自身の主体的な選択でもあった。

4 「新しい人よ眼ざめよ」における「絶望的な蛮勇気」との決別

この意味で、『万延元年』以後の大江の創作活動の中で、とりわけ「絶望的な蛮勇気」との関係で参照すべきなのは、連作短編集『新しい人よ眼ざめよ』の最終篇「新しい人よ眼ざめよ」である三。そこには次のように特徴的な泡鳴への言及がある。

イーヨーが畸形の頭を持って生まれての直後、僕が混乱した低迷状態のうちにあったさなかに、やはりH君を介して突然キークから連絡があり、国際文化会館に宿泊している彼女に会った。妻はまだ入院していた。その際キークが思いがけず、しかし変化の道筋はすぐに辿れる、あきらかな見事さの容姿となっていたことはさきに書いた、その際キークから受けた、性的療法とでもいうべきあつかいに、僕は慰謝された。しかもその間、実の姉と性交しているのに似た、生なましい罪障感をいだきつ

づけて、かつはグロテスクな——泡鳴の言葉をかりれば——「絶望的な蛮勇気」とでもいうべきものをそそりたてられる思いもあった。それを媒介にして僕が了解したのは、二十一歳の自分が一夏離れてお互いを考えてみることを思い立ったのは、まだ自分より稚なく感じられたキーコとの関係に、実の妹と性交しているような罪障感があったからだということである。ほぼ十年をへだてたキーコとの性関係の回復は、『個人的な体験』に書いている、ブレイクを卒論にした同級生との性的なシーンに反映している。

大江自身を思わせる語り手の「僕」は、ヨーロッパ旅行の際、ベルリンで、かつての女友達キーコと再会する。彼女は「僕」の二つ下で、両親がドイツの建設会社に勤めていた関係でベルリンで育ち、日本の大学教育を受けるために東京に戻って、当時二十歳だった「僕」と出会った。彼女の父親は「朝鮮人であるが、当時併合されていた国の人間として改姓して東京帝大を卒業し、日本人の女性と結婚した」が「敗戦を機に李という姓を回復した」。「僕」はこの李という姓から「木と子を分離してキーコという渾名」を作り呼びならわしていた。キーコはこの渾名が気に入って「僕」を家庭教師とし、一年後に国際基督教大学に入学した後は、「彼女の生理期間より他は毎日ただ性交するためだけに会うという関係に入る」。夏休みになり「僕」の提案で「この四十日ほどの間、別れて暮らして、その後の先行をそれぞれ考え」ることになるが、秋に再会した

キーコには別の男（「キーコのセーターを着た東南アジア系の美しい青年」）ができていて、「僕」との関係は一度途絶える。結局キーコはその「シンガポールからの留学生」とも別れ「そのうちドイツから技術研修のために企業留学して、キーコを通訳に備った情報工学の技師と結婚して、大学を中退しヨーロッパに渡」る。

それから十年後、結婚して「イーヨーが畸形の頭を持って生まれての直後」の「混乱した低迷状態」の「僕」は、一人で東京に一時帰国したキーコと再会し、再び性的関係を持つことで慰められる。この経験は『個人的な体験』に書いたと「僕」は書くが、それはキーコが大江の長篇小説『個人的な体験』^{二四}の火見子のモデルであるということである。

この記述が大江の伝記的事実とどこまで一致するのかについては、今後の大江の伝記的研究の進展（それが望ましいかどうかも含めて検討する必要があるが）を待たなくてはならないが、火見子とキーコとの間にはさまざまな差異がある。火見子は九州出身の東大の学生であり、「鳥」と同級生である。火見子にとって「鳥」との最初の性交（それは「強姦」だったと火見子は後に主張する）が初体験だったのに対して、「性的に自由な国で育ったから、わが国の常識では考えられぬほど自由」とされるキーコにとって、「僕」との性関係がどのようなものであったのかは明らかにされない。

そしてここで「僕」がキーコとの性交を「実の姉と性交しているのに似た、生なましい罪障感をいだきつづけて、かつはグロテスクな——泡鳴の言葉をかりれば——「絶望的な蛮勇気」とでもいうべ

きものをそそりたてられる思いもあった」と回想しているのは注目される。この「生なましい罪障感」は、妻を裏切っていることへの罪意識ではなく、「実の姉と性交している」という近親相姦の感覚に由来している。実際二十歳の時最初にキーコと性交した時にも「実の妹と性交しているような罪障感があった」と「僕」は思い至る。

「僕」は日本人であり、キーコは在日朝鮮人と日本人の混血であって血縁関係はないにもかかわらず、「僕」はなぜ近親相姦的な「罪障感」を持つのか。その理由は直接説明されないが、「絶望的な蛮勇気」という「泡鳴の言葉」は、それを考える手がかりになる。『個人的な体験』において、障害児誕生の衝撃で性的不能になった主人公「鳥」は、火見子に励まされて肛門性交を行い自己回復を図るが、その描写には確かに「絶望的な蛮勇気」の大江的表現が展開されていた。ただしここで勇気を出しているのは「鳥」ではなくむしろ火見子であるとも言える。義雄がお鳥を絶望的に看病するように、火見子は「鳥」を絶望的に看病したとも読める。

「新しい人よ眼ざめよ」における「僕」とキーコの関係は、これら義雄・お鳥、「鳥」・火見子の関係を形式的に反復しつつ、重要な部分において対立する。すなわち義雄が「部落民の熱病人」と考えるお鳥に対して、自分とは異質な存在へのエキゾティクな魅力を感じているのに対して、「僕」はキーコに対して同質的なものを感じている。この同質性はどこから来るのか。義雄が自分を日本帝国のマジョリティの中心的存在と考えている（現実にはそうでな

いところに、『泡鳴五部作』のドン・キホーテ的滑稽さがある）のに対して、「僕」は日本人でありながらマイノリティ意識があり、それがキーコとの同族意識につながっているのかもしれない。これは、『万延元年』の鷹四が「自分と妹をめぐって一種の貴種流離譚を作りあげ」ることで妹との近親相姦に陥ったこととも関連している。

いずれにしろ火見子が、障害児の誕生に動揺した「僕」を性的に癒し治療するある種理想化された女性として描かれているのに対して、キーコは現実のモデルがいるかいないかに関わらず「非理想的な女性として描かれている。とりわけ三度目の出会いにおいて、「僕」は「確実に中年女となった」キーコに決定的に幻滅する。「僕」のホテルの部屋にきたキーコは、イーヨーの性欲処理の問題について露骨に聞いて来て「僕」を不快にさせる。翌日キーコの希望で二人で「ハード・ポルノ映画」を見るが、「僕」が「主役の娘さんは無惨なくらい性交したね」と感想を述べると、キーコは「私たちも、まだ子供の頃、繰りかえし性交したよ、あなたにならっていえば無惨なくらいに、無惨な以上に」と、過去の自分たちの性交を否定的に形容する。キーコは更に、「僕」が「ベルリン反核ティーチ・イン」で訴えた「核戦争による世界の破壊」の可能性をも否定する。キーコがどうしてこのように「僕」の気持ちを逆なでするような言動を取り敵対的なかは明確には語られない。『個人的な体験』の火見子が、「鳥」との最初の性交（「鳥」にとっては和姦のつもりだった）を「強姦」と形容したように、キーコも過去の「僕」

との性交によって傷ついていたのかもしれない。いずれにしろキークと「僕」はもはや近親的な関係ではなく、「威厳と花やぎを失わぬが、しかしあきらかに中年も終りかたの朝鮮人」と「牀^{くらだ}じゅうに悲嘆^グの気分をあらわしている、これも中年の終りかたの日本人」として互いに絶対的に距てられていることを「僕」は認識する。この距離を埋めて「むり」に「関係」を作る「絶望的な蛮勇気」を「僕」はもはや持っていない。

5 「勇気」から「模範」へ

大江はエッセイ「絶望的な蛮勇気」の後にアメリカへ長期旅行を行い、帰国後「記憶してください、私は……」という小文^六を発表している。それ以前大江はヨーロッパや中国を訪れていたが、アメリカ旅行は、それらとは異質の衝撃を大江に与えたように見える。すなわち大江はこのエッセイで自身のアメリカ旅行を、夏目漱石の英国留学体験になぞらえ、旅の間漱石について考えていたと語る。

そもそも大江は地元愛媛県出身の正岡子規を尊敬し、その親友の漱石にも好感を持っていた、松山を批判した『坊ちゃん』を「質の高い、本当に良いものがある」と評価していた。アメリカに行った大江は「アメリカの日本文学研究者の漱石への関心もまた質の高いもので、教えられることが多かった」。そしてその一人から江藤淳がハーヴァード大学で行った漱石についての講演の話を聞き、帰国

後江藤の漱石論を読む中で、漱石の『こころ』の「先生」の遺書の言葉「記憶してください、私はこんな風にして生きて来たのです」を、二葉亭の「僕は人に何らか模範を示したい」という言葉と重ね合わせて、両者に共通するものとして「一種強烈な使命感」（江藤淳から借りた言葉）を見るようになる。

アメリカ旅行を間に挟んだ「絶望的な蛮勇気」と「記憶してください、私は……」とは、共に二葉亭を起点としつつ、それぞれ異なる方向の系譜学を展開する。すなわち前者は「二葉亭から岩野泡鳴にいたる」「社会的にはアウトサイダーでありながら、しかも、日本および日本人について正面から考えつづけることをやめない、硬文学の志をそなえた人びと」の系譜であり、後者は二葉亭・鷗外・漱石といった「その生活と思想のほとんどあらゆる位相を、圧倒的な西欧文明の影響下に曝した最初の日本の知識人であったにもかかわらず——というよりはむしろその故に——つねに日本人としての文化的自覚を失わず、一種強烈な使命感によって生きていた人びと」の系譜である。前者が「アウトサイダー」であるのに対して後者は「インサイダー」と言える。『万延元年』を分水嶺として、大江の小説は次第に後者の方に軸足を移して行くように見える。それはまた「勇気」を振るうことから「模範」になることへの転回でもある。実際「新しい人よ眼ざめよ」に描かれる「僕」（「テレビ・チーム」とともにヨーロッパを旅行する）は、かつて大江がエッセイ「絶望的な蛮勇気」において批判した「マス・コミュニケーション」にこそてはやされる「社会の名士」の姿そのもののようにも見える。し

かしそれでも大江が自らを「俗物」とは異なる存在として表象できたとすれば、それは同時代の政府やその支持者たちが顧みない核や障害者をめぐる「政治的正義」（それが本心に正しかったかどうかは別に検証が必要だろうが、少なくとも「義」であったことは確かである）へのコミットにおいてであるだろう。それは泡鳴とは別の日本近代文学の系列へのコミットとも重なって行く。「六八年」以後の日本社会の政治的対立軸は、体制内「インサイダー」と体制外「アウトサイダー」との対立ではなく、体制内「インサイダー」と体制内「アウトサイダー」の対立へと転換する。夏目漱石の文学はこの体制内「アウトサイダー」の象徴的な役割を果たす。

大江は非常に博搜的な読書家であり、その文学は、古今東西のさまざまな文学の膨大な引用の花束となっている。その中で泡鳴の占める位置は一見小さいが、しかし大江文学についてのこれまでの批評・研究において死角となっていた部分を考える上で示唆を与えるように見える^{一七}。尾崎真理子は大江が島崎藤村について一度も言及しないにもかかわらず、その文学的テーマ（「死んだ父」へのこだわり、近親相姦、故郷の「村」の物語化など）が、藤村と類似性を持つことを指摘しているが^{一八}、この問題は「自然主義」文学全般と大江との関係として捉え直すことができる。大江は戦後文学の後継者を自任し、戦前の文学については特に後期になるほど自己を漱石的なものへとつなげようとする。しかし尾崎が指摘するように、明治維新や「父」との関係において、大江は漱石より藤村に近い。そしてこの藤村への近さは、藤村だけではなく、日本「自然主義」文

学と大江の近さでもある。

実際初期大江がこだわった「性的人間」の問題は、田山花袋の「性欲」の問題化の反復であり、サルトルの実存主義の受容は、結果的に泡鳴の「神秘的半獣主義」や「刹那主義」哲学と類似するようにも見える。にもかかわらず大江自身が日本「自然主義」文学について語ることが少ないとすれば、その一因は、同時代に確立する「文学史」の制度的枠組が、「自然主義」批判の言葉によって形成されていたことにあると考えられる。実際平野謙・中村光夫・加藤周一から吉本隆明・江藤淳を経て柄谷行人に至るまでの日本の「文学史」言説は、戦前の日本の不完全な近代化・封建的残滓の象徴として日本「自然主義」文学をとらえ、それを乗り越え、真に近代化した日本社会にふさわしい文学をいかに作るかという問題意識によって規定されていた。そこでは「自然主義」文学の同時代にそれを懷疑したとされる夏目漱石（そして柳田國男、折口信夫、小林秀雄等々）が特権化される^{一九}。

しかし日本「自然主義」文学は確かに明治維新以降の日本の不完全な近代化の徴候であったとしても、それを批判することが、そのまま日本の真の近代化の実現あるいは封建的残滓からの脱却に寄与するという保証はどこにもない。「文学」を変えることは「現実」を変えることにはならない。「現実」はただ「現実」を変えることによってのみ変わる。むしろ漱石らの言説は、日本の不完全な近代化・封建的残滓を「様々な意匠」によって隠蔽し、それを認識させないことで、それらを延命させる効果を持つ。

大江はこの「漱石中心主義」的文学観に適應し、進んで自らのものとしたように見えるが、しかし大江の文学の魅力はむしろその「漱石中心主義」から逸脱した「自然主義」文学への近きにある。この場合の「自然主義」とは、「インサイダー」化Ⅱ「人間」化できない「アウトサイダー」性Ⅱ「獣」性こそが、「人間」の本質であるという逆説的認識である。

《注》

- (一) 初出『新潮』一九六五年一月号。〈作家のプライド〉特集に寄稿した小文である。引用は『大江健三郎同時代論集 3』（岩波書店、一九八一年）に拠る。
- (二) この二葉亭の言葉は、「二葉亭が死の前年にロシアにゆくとき、彼の健康がすぐれぬのを危ぶんだ矢崎鎮四郎に」口頭で語ったとされるもの（中村光夫『二葉亭四迷伝』、講談社、一九五八年）である。
- (三) 初出『新小説』一九〇九年二月。『耽溺』は一九四八年に岩波文庫版、一九五四年に角川文庫版が出ているが、大江がどの版を読んだかは不明。
- (四) 『泡鳴五部作』は、『発展』『毒薬を飲む女』（または『毒薬女』）『放浪』『断橋』『憑き物』の五つの小説の総称であるが、非常に複雑な成立過程を持ち、泡鳴が決定版を出す前に死亡したために、諸本による異同が大きい。大江

がどの本で読んだのかは決定できないが、大久保典夫（『岩野泡鳴全集』第二卷（臨川書店、一九九四年）「解題・解説」）によれば、流布本で五部作全体が収録されているのは、新潮文庫版上下二卷（一九五五年）と講談社版『日本現代文学全集・岩野泡鳴集』（一九六五年）のみであり、「絶望的な蛮勇気」の執筆年代から見て、新潮文庫版を参照した可能性が高いと考え、引用はすべて新潮文庫版に拠る。

(五)

『日本のアウトサイダー』中央公論社、一九五九年。

(六)

大江健三郎・江藤淳編『われらの文学 第十八 大江健三郎』、講談社、一九六五年。本文末尾に「（一九六五夏、ケンブリッジ）」と記されている。

(七)

岩波新書、一九六五年。引用箇所を含む「VI ひとりの正統的な人間」の章末には「（六四年十二月）」の日付がある。

(八)

初版一九六七年、講談社。引用は講談社文芸文庫版（一九八八年）に拠る。以下、『万延元年』と略す。『万延元年』については、大杉重男「『本当の事』を言った「獣」——大江健三郎『万延元年のフットボール』論」（『人文学報』二〇二一年三月）において論じたが、本稿は一部重複しつつそれを補足し、泡鳴や「自然主義」の視点から捉え返すことを目指している。

(九)

『万延元年のフットボール』8 本当のこと云おうか（谷川俊太郎『鳥羽』）。

(一〇) 注七参照。

(一一) 『万延元年のフットボール』「12 絶望のうちにあって死ぬ。諸君はいまでも、この言葉の意味を理解することができであろうか。それは決してたんに死ぬことではない。それは生れでたことを後悔しつつ恥辱と憎悪と恐怖のうちに死ぬことである、というべきではなからうか。(J・Pサルトル、松浪信三郎訳)」。

(一二) 「著者から読者へ」、講談社文芸文庫版『万延元年のフットボール』所収。

(一三) 短編集『新しい人よ眼ざめよ』の初版は講談社一九八三年刊行。引用は『大江健三郎全小説 5』(講談社、二〇一八年)に拠る。

(一四) 初版は新潮社、一九六四年。

(一五) 野崎歓は「あの忘れがたい火見子にはモデルがいたのか、あそこに書かれていたことは本当だったのか。驚きのうちに読者はそう考える。キーコもまた、『新しい人よ眼ざめよ』という小説の登場人物にほかならず、それが事実を下敷きにしているとはかぎらないことを忘れてしまうのだ。とはいえ、そんな読み方は作者自身によって誘導され、許諾されている」と述べている(『無垢の歌——大江健三郎と子供たちの物語』(生きのびるブックス、二〇二二年)第一章「上品な人間」)。小谷野敦は火見子のモデルは岸田衿子で

はないかと推測する(『江藤淳と大江健三郎』、ちくま文庫二〇一八年)。尾崎真理子は「キーコは「見る前に飛べ」の女子学生ともその個性がつながる」と指摘しているが(『大江健三郎全解説』、講談社二〇二〇年)、「見る前に飛べ」(初出『文学界』一九五八年六月)の十八歳の受験生田川裕子は、語り手の家庭教師「僕」の子供を妊娠するが、結核のために中絶するという設定において、むしろ兄の鷹四に犯され妊娠・中絶する『万延元年』の「白痴の妹」につながるように見える。「見る前に飛べ」において、火見子やキーコと類似するのは、三十五歳の娼婦の良重^{よしえ}の方だろう。

(一六) 『図書』一九六五年十二月号。引用は『大江健三郎同時代論集 3』(注1参照)に拠る。

(一七) 連作短編集『河馬に噛まれる』の「河馬の勇士」が考案する「糞便処理装置」は、同じく浅間山麓を舞台とする岩野泡鳴の短篇「浅間の霊」(『中外』一九一七年十一月)の発明狂の役人が発明する便所の「はねよけ」機を連想させる。

(一八) 『大江健三郎の「義」』、講談社、二〇二二年。同書で尾崎は、『万延元年のフットボール』と『夜明け前』との類似をさまざまな観点から分析し、「フランスをはじめとする海外の文学に多くを学んできた大江健三郎だが、もつとも影響を受けた作家はサルトルでもドストエフスキーでもなかった。島崎藤村こそが大江の原点に関わった作家であり、大江は

日本の近代日本文学。この国の自然主義に深い根を持つ作家なのである」と述べる。これに対して桂秀実は、片岡啓治が『大江健三郎論 精神の地獄を行く者』（立風書房、一九七三年）において既に『万延元年』と『夜明け前』の関係について考察しており、「大江―藤村問題のプライオリティは片岡にある」と尾崎を批判している（「桃太郎の父 大江健三郎の「大逆」」、『ユリイカ 七月臨時増刊号 総特集 ※大江健三郎 1935-2023』（二〇二三年七月）所収）が、片岡の論が同時代批評であり、後期大江文学の展開以前のものであるのに対して。尾崎の分析は、大江の全作品を踏まえた上で、より広い視野に立った包括的な性格を持っている点では評価できる。ただ尾崎の論で問題なのは、藤村との関わりを平田篤胤や柳田國男との関わりと連続的に捉えている点であり、そのことによって大江を事実上天皇制擁護の作家として描き出していることにある。尾崎が藤村・平田・柳田と大江に共通して見る「義」は、「正義」とは異なる東アジア的専制主義の刻印を帯びている。

（一九）私は、夏目漱石は徳田秋聲（都市的自由主義）、柳田國男は島崎藤村（国学的農本主義）、折口信夫は岩野泡鳴（神秘的半獣主義）、小林秀雄は正宗白鳥（批評的ニヒリズム、告白）、大江健三郎は田山花袋（性的人間）とそれぞれ存在論的に対応し、後者に対する前者の倫理的・思想的超越

とその破綻という図式によって、日本近代の男性的「文学史」は再構築することができると考える。